犬追物関係資料（島津家伝来）

重要文化財（歴史資料）
平成 29 年 9 月 15 日指定
所在地：尚古集成館
所有者：株式会社　島津興業

犬追物は、馬に乗った武士が走り回る犬を的に矢を射て、その当たり矢を競う武芸である。矢は犬を殺さないよう、先が平らになった「犬射蟇目」という鏑矢が用いられた。

鎌倉時代には、笠懸・流鏑馬とともに「馬上の三ツ物」といわれ、武士の必須の武芸として流行したが、南北朝時代、戦闘が一騎打ちから集団戦に変化し、さらに鉄砲伝来によって騎射の重要性が薄れて衰退した。しかし、島津氏は、初代島津忠久が源頼朝の庶子と伝えられていたこと、また頼朝が守護職に任じた御家人で江戸時代までその領域の大半を維持したのが島津氏だけだったということもあり、鎌倉時代からの文化を重視し、犬追物も明治時代まで張行し続けた。このため、島津家には中世から近世・近代にわたる膨大な犬追物故実書・絵画、明治期に使用された装束・道具類、さらに写真までが伝えられた。中世に流行した武芸の資料がこれほど多く、また装束・写真まで残っている事例は他になく、平成 29 年 9 月 15 日一括して重要文化財に指定された。

犬追物関係資料（島津家伝来）
（写真提供：尚古集成館）

桂　菴　墓

記念物（史跡）
昭和 11 年 9 月 30 日指定
所在地：鹿児島市伊敷二丁目
所有者：鹿児島市

この墓は応仁の乱に続く戦国の争乱で京都が中心地としての役割を果たすことができなかったとき、11 代島津忠昌が、藩内で朱子学を振興させるために招いた桂庵玄樹の墓である。桂庵に始まる儒学の流れは薩南学派といわれた。

桂庵は忠昌に招かれてからこの地で没するまで、多くの門弟を育成した。ここ東帰庵跡は、鹿児島の学問の流れをつくったいわれの深い場所でもある。

桂庵は、応永 34（1427）年、山口に生まれ京都の南禅寺に入って修行した。後に大内氏の貿易船で明に渡り、7 年の滞在期間中に朱子学を学んで帰国したが、応仁の乱のために京都を避け、石見・豊後・肥後を経て、文明 10（1478）年に鹿児島に入った。

鹿児島では、現在の清水町、後に長田町に住んでいたが、76 歳の時に伊敷梅ヶ渕の東帰庵（今の墓所）に隠退して、永正 5（1508）年に 82 歳で没した。

鹿児島で没するまで約 30 年間、明で学んだ朱子学を講じ、文明 13（1481）年にはわが国で初めて朱子新註の『大学章句』を刊行した。多くの門人を教え、朱子学の普及に努めた功績は歴史上名高い。

墓の右側にある碑文は、『言志四録』の随想録で知られる幕末の儒学者佐藤一斎によるものである。

桂菴墓

旧集成館　附 寺山炭窯跡
関吉の疎水溝

記念物（史跡）昭和34年2月25日指定
重要文化財（建造物）昭和37年6月21日指定
世界文化遺産構成資産
平成27年7月5日記載決定
所在地：鹿児島市吉野町、下田町
所有者：株式会社 島津興業　他

集成館は、嘉永4（1851）年、薩摩藩主に就任した28代島津斉彬が築いた洋式工場群の総称。日本初の洋式工場群で、鉄製砲鋳造のための反射炉・溶鉱炉・鑽開台、ガラス工場、蒸気機関の研究施設などがあった。斉彬時代の集成館は、文久3（1863）年の薩英戦争でイギリス艦隊の攻撃を受けて焼失したが、29代忠義らの手で再建され、日本最先端・最大級の工場群としてよみがえり、幕末・維新期の薩摩藩の活躍を支えた。維新後は軍が管理し、明治10(1877)年の西南戦争時には戦場となり工場の大半が焼失・破壊された。

集成館では大量の燃料が必要とされ、斉彬は火力の強い白炭の増産を図った。吉野寺山に、安政5（1858）年に斉彬が築かせた炭窯が遺り、その近くには建築経緯を記した「炭窯の碑」が建っている。また集成館では水車動力も用いられており、その用水として、享保（1716~1736）年間、21代吉貴が稲荷川上流部の関吉から仙巌園まで引いた疎水を再利用し、途中、吉野雀ヶ宮で分岐させて集成館に導いた。関吉の取水口は往年の姿をよくとどめており、史跡に指定されている。

附寺山炭窯跡（2014年撮影）

寺山炭窯跡及び炭窯の碑

炭窯は、28代島津斉彬の集成館事業のシンボルとなった反射炉等の燃料として木炭（白炭）を製造した炭窯である。

炭窯の大きさは、高さは地上約2m、直径は約5～6mである。

『鹿児島県木炭史』によると、当初は燃料として、日州御手山の白炭が使用されていたが、その後、反射炉その他集成館における木炭需要の増大に対処するため、安政4（1857）年12月に「鹿児島の吉野寺山に白炭窯及び黒炭窯の建設と柞灰、材木仕込みなどについて日州御手山の支配人山元藤助に調査を命じている。」と書かれている。

なお，炭窯自体は周囲を石で築いており、規模構造が雄大堅牢で、木炭史を語る上での数少ない資料ともなっている。

「炭窯之記」の碑は、安政5（1858）年、斉彬が逝去する5ヶ月前に建立されたもので、碑文の文章と文字は八田知紀の作であり、斉彬の直接の意向を受けたものである。

周辺は現在、造営当時及びその後伐採されたアラカシやイチイガシ、スダジイ、タブノキ等の二次林に覆われているが、伐採を免れた場所はスダジイの巨木からなる森が残されている。令和元(2019)年7月に起こった土砂災害によって窯跡は大きな損傷を受けた。

関吉の疎水溝

関吉の疎水溝は、楠木川（稲荷川）の上流（下田町）から吉野町磯に水を引き込むために開渠や隧道によって造られた全長約7kmにも及ぶ疎水溝である。

当初は磯別邸内の用水として利用されていたが、嘉永5（1852）年に斉彬が磯の集成館事業を創設した際に動力に水力を利用することになったとき、疎水溝を再利用し、大正4（1915）年に工場が廃止されるまで利用されていた。

現在も下田、実方地区かんがい用水路として利用されている。磯邸の用水と近代産業の出発点となった集成館事業の動力等に利用された貴重な文化遺産である。特に取水口周辺は、岩盤をくりぬいた水路がほぼ原形をとどめており、往時の姿をよく残している。

取水口

関吉の疎水溝

鹿児島紡績所跡

記念物（史跡）
昭和 34 年 2 月 25 日指定
追加指定　平成 27 年 3 月 10 日
世界文化遺産構成資産
平成 27 年 7 月 5 日記載決定
所在地：鹿児島市吉野町
所有者：鹿児島市　他

わが国最初の洋式紡績所があった所で、現在はその当時の門柱が残っている。29 代島津忠義は、28 代斉彬の知遇を受けた石河確太郎のすすめで斉彬の遺志を受けつぎ、大規模な洋式紡績工場を建設するため、慶応元（1865）年に薩摩藩留学生と共に新納刑部・五代才助（友厚）をイギリスに派遣し、紡績機械の購入と技師を招く交渉にあたらせた。慶応 2（1866）年 11 月にイー・ホーム他 3 人の技師が到着し工場建設に着手した。翌年、プラット・ブラザーズ会社製の紡績機械とともに工場の技師であるジョン・テットロウ他 2 名も到着し、慶応 3（1867）年 5 月に完成、操業を開始した。紡績所にはおよそ 200 人の職工が働き、1 日 10 時間就業して、白木綿や縞類を織った。紡績所は明治 30（1897）年に閉鎖されたが、当時イギリスから輸入した紡績機は、現在は県指定文化財として尚古集成館に展示されている。なお、この紡績所が建設される前に斉彬は手織りの中村紡績所（真砂町国道沿い）、さらに水車利用の紡績工場である田上水車館（田上町）、永吉水車館（永吉町）をつくり、日本の綿紡績業に大きな貢献をした。

平成 25（2013）年、国の記念物（史跡）として、「鹿児島紡績所技師館（異人館）」から「鹿児島紡績所跡」に名称を変え、指定された。

また平成 27（2015）年に世界文化遺産に記載された「明治日本の産業革命遺産」の構成資産の一つとなった。

鹿児島紡績所跡

大口筋 白銀坂　龍門司坂

記念物（史跡）
平成 18 年 7 月 28 日指定
所在地：鹿児島市宮之浦町　他
所有者：鹿児島市　他

大口筋（薩摩街道）は、江戸期の薩摩藩の主要街道の一つで、もともと小倉筋（西目筋）と東目筋に分けられていたのが、寛永（1624～1644）年間に名称が改められ、小倉筋は出水筋・大口筋に、東目筋は高岡筋（日向筋）となった。

大口筋は、鹿児島城下から吉田・姶良・加治木・溝辺・横川・栗野・菱刈を経て大口に至る道である。途中の山道には石畳が敷かれ整備された。

白銀坂は、鹿児島市と姶良市にある峠の険しい山道で街道一の難所であった。かつては、薩摩と大隅の国境に位置しており、重要な街道としての面影をよく留め、急坂部に約 1.5 kmにわたり山中から調達した安山岩質の割石を用いた石畳がよく残っている。白銀坂は、平成 9（1997）年から平成 16（2004）年まで整備事業が実施された。

このように薩摩藩の主要街道である大口筋のうち、保存状態が良好な白銀坂約 2.8kmと龍門司坂約 0.5kmは、わが国の近世の交通を考える上で貴重である。

また、姶良カルデラの火口壁にもあたり、壁面に沿う道で崩壊しやすい地形上には東南アジア原産のホウライチクが列上に並んで崩壊を防止している。坂の途中には展望所が設けられ、鹿児島（錦江）湾、姶良平野その奥に霧島連山等を望めるところがある。足を伸ばすと落差 20m の布引の滝につながる道もあり、白銀坂にはシイやアラカシなどの照葉樹林に被われている所も多い。白銀坂の鹿児島市からの入り口一帯はかつて吉野牧の末端部で、その後スギが植栽されたり、かつて専売品の樟脳を採るためのクスノキが植栽されたりしたところが、独特の森林景観を作っており、バードウオッチングや散策が楽しめる。

大口筋　白銀坂　龍門司坂

仙巖園　附　花倉御仮屋庭園

記念物（史跡）
昭和 34 年 2 月 25 日指定
追加指定　平成 25 年 10 月 17 日
世界文化遺産構成資産
平成 27 年 7 月 5 日記載決定
所在地：鹿児島市吉野町
所有者：株式会社 島津興業

仙巖園は、万治元(1658)年に 19 代島津光久が別邸として造営したものである。

この地は、対岸に桜島を望み、後背地は姶良カルデラの絶壁で奇岩・奇石が多く、中国竜虎山の「仙巖」に似ていることから「仙巖園」と名付けられ、その後、21 代吉貴の時代に曲水の庭が設けられたと伝えられる。吉貴はまた、琉球経由で中国から孟宗竹を輸入して、わが国で初めてこの庭に植え江南竹林の碑も残っている。

さらに、27 代斉興は嘉永元(1848)年に海岸を埋め立て、現在見られるような「大名庭園」としての回遊式形態が整った。

この庭園の特色は、常緑の磯山を背景にして、前面に錦江湾と秀麗な桜島の自然をそのままとり入れた雄大絶佳な借景庭園であることにある。

また、斉興の時代の庭園後背地絶壁の「千尋巌」の文字や庭園の北方約 1 km奥に建てられた「花倉御仮屋跡」も貴重な史跡である。平成 27(2015)年に世界文化遺産に記載された「明治日本の産業革命遺産」の構成資産の一つとなった。

仙巖園附花倉御仮屋庭園
（写真提供：株式会社 島津興業）

仙巖園と桜島

千尋巌

正門

錫門

（写真提供：株式会社 島津興業）

旧島津氏玉里邸庭園

記念物（名勝）
平成 19 年 7 月 26 日指定
所在地：鹿児島市玉里町
所有者：鹿児島市

旧島津氏玉里邸庭園は、27 代島津斉興が天保 6（1835）年に造営した庭園で、「上御庭」と「下御庭」に分かれる。

「上御庭」はかつての主屋建築群の南庭として造られたもので、東側に 3 つの築山と楕円形の園庭を持つ。書院のあった旧位置からは樹木越しの南方に丘陵を望むことができ書院は失われたものの書院造庭園の遺風を今に伝える。

「下御庭」は、敷地北寄りに茶室が建ち、南正面に池庭が展開する。茶室の東側には渓谷を象った滝流れがあり、自然石の大石橋の下を潜って池へと注ぐ。53 個に分割して運び込まれた巨石や、頂部に獅子の彫刻を載せた山灯籠、笠石に瓦・軒を浮彫りした三重石塔型の灯籠など、独特の意匠を持つ景物が随所に見られる。

江戸時代末期に造営された本庭園は、書院からの鑑賞を意図して造られた庭園と回遊式庭園の双方の様式を併せ持った庭園であり、意匠・材料などの観点から地域独特の風土的特色を示しており、南九州の大名庭園として学術上・鑑賞上の価値は高い。

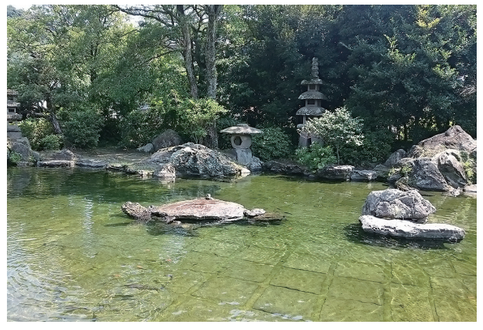
なお、玉里邸の諸建築は明治 10（1877）年の西南戦争で焼失するが、斉興の五男、島津久光が再築し、明治 12（1879）年に上棟した。

その後、昭和 20（1945）年の太平洋戦争によって茶室、長屋門、黒門を残して建造物は焼失した。

茶室は、書院造りの客室 6 帖、控の間 6 帖で、それに縁側が巡らされている。縁柱が面皮付であり、屋根裏には角柱と竹垂木を間垂木として利用し、床の間は、落掛がなく、アーチ形の塗縁として櫛形欄間に調和させ、床柱は角柱、中柱は磨竹である。

下御庭の植物は、創建当時の植物や管理が充分に為されなかった頃のものと入り混ざっている。昭和初期にはマツやカエデ、ツツジ、サクラが主体であったが、現在はクスやムクノキ、ハゼノキ等鳥が運んだと思われる植物が入っている。創建当時植栽されたと思われるタイサンボクやシマサルスベリ、イヌマキ、モッコク、フジなどが巨木となって生き残り、南九州の園芸文化を醸し出している。平成 19（2007）年、国の記念物（名勝）に指定された。

旧島津氏玉里邸庭園


上御庭

茶室

下御庭

黒門

国指定の文化財

キイレツチトリモチ産地

天然記念物（植物）
大正 10 年 3 月 3 日指定
所在地：鹿児島市吉野町字桜谷一帯
管理団体：鹿児島市　他

キイレツチトリモチは、明治 44(1911) 年に鹿児島市喜入町（旧揖宿郡喜入町）ではじめて発見されたのでこの名がつけられた。その後、鹿児島市吉野町の現在地で多数発生しているところが見つかり、そのためこの地が指定されることとなった。この植物は、日本と台湾だけに自生する珍しい植物であり、この地は、国指定天然記念物の唯一の指定地である。

キイレツチトリモチは、ネズミモチ、トベラ、シャリンバイ等の根に寄生し、10 ～ 11 月頃に黄色の花茎を地表から出す。花茎は直立し高さ 3 ～ 10cm 程度で、ツクシを大きくしたような格好である。花茎には 3 ～ 10 枚前後の肉質の葉をつけ、上部に黄褐色の細長い花穂があり、その中に多数の雄花と雌花がある。雄花は成熟すると多量の蜜をだして黒くなり、黄色い花穂中に黒い斑点が現れる。雌花は花穂の中で散在する雄花を埋めるようにびっしりと粒状になって分布している。

種子は発芽しても葉緑体を持たないため、ネズミモチなどの細根に付着したものだけが成長することができる。

指定地はかつての石切場・畑周辺で錦江湾の潮風がよくあたる里山であったが、水害による崩落や里山の手入れが行われなくなったこと、イノシシの掘り起こし等から生育場所が限られてきている。

この植物は鹿児島県内ではここ吉野町字桜谷一帯だけでなく、鹿児島市喜入町をはじめ県内の海岸に面した地域の低木林内でも見ることができる。

キイレツチトリモチ産地

（写真提供：鹿児島県立博物館）

城　山

記念物（天然記念物・植物、史跡）
昭和 6 年 6 月 3 日指定
所在地：鹿児島市城山町
所有者：鹿児島市

城山は鹿児島市の中心に横たわる標高約 107m の丘陵であり、わが国の西南暖地の植物群落の特色となっている照葉樹林が、原生林に近い姿で残っていることは、極めて貴重である。

また、中世の山城（上山城）の遺構を残し、近世鹿児島（鶴丸）城の城域の一部を形成した史跡でもある。

南北朝時代（1333 ～ 1392）においては上山氏の居城（山城）であったが、江戸時代のはじめに、鹿児島（鶴丸）城の後背地として城の一部となり、一般の立入禁止の区域ともなっていた。このため、里地にあっても植生は回復し植物学上からも、西南日本の固有の自然林を形成した。南九州植物分布の縮図といわれるほどの植物の宝庫となっている。都市の真ん中の狭い範囲の中に約 500 種もの植物が茂っているところは、全国でもその例がない。なかでも有名なものはクスノキの巨木で、元ウィーン大学総長で世界的な植物学の権威者モーリッシュ博士によって、全世界に紹介された。

クスノキの樹齢ははっきりとはしないが、古いものは樹齢 400 ～ 500 年と推定されている。その他、常緑樹ではバクチノキ（バラ科）、ショウベンノキ（ミツバウツギ科）、バリバリノキ（クスノキ科）等といった珍しい名前の木もある。

城山

また、蔓性植物・暖地性羊歯類が群生し、シロヤマシダ、シロヤマゼンマイ、ヤマコンニャク、サツマイナモリの発見地でもある。

城山が、県・市民の心に今も深く印象づけられているのは、明治10(1877)年9月、西南戦争の終結に際し、薩軍の本営となり、9月1日から同24日までの苦闘の末に力つき、刀折れて、最後の政府軍総攻撃を受けて、西郷隆盛らが城山の露と消えたところでもあるからである。

その城山に在郷軍人会が中心となって勤労奉仕で展望台までの軍用道路(現在の遊歩道)を完成させたが、自動車が通る道路は聖地を冒涜するものだと反対運動が起こり、文化庁が調査して文化財となり、市民が親しむ遊歩道となった。

また、城山及びその周辺には、次のような数々の史跡もある。

- **西郷隆盛洞窟**（134ページ参照）
- **西郷隆盛終焉の地**（135ページ参照）
- **私学校跡石塀**（76ページ参照）
- **薩摩義士の碑**〈大正9(1920)年建立〉

宝暦年間、木曽川治水工事の偉業を成し遂げた薩摩義士をたたえて建立された顕彰碑で、将棋の駒状の86基の碑が階段状に並べられている。

薩摩義士の碑

薩摩鶏

記念物（天然記念物・動物）
昭和18年8月24日指定
所在地：鹿児島市内一円（地域を定めず）
管理団体：鹿児島県

薩摩鶏は、鹿児島県・宮崎県南部地域において育成・保存されている。その起源は、江戸時代初期ともいわれ、改良された闘鶏の一種で勇猛な性質を持っている。

古くは「薩摩地鶏」と呼ばれていたが、昭和時代になって、いつとなく「薩摩鶏」と呼ばれるようになった。

薩摩鶏の姿勢は、素朴にして威厳を備え、羽色・羽毛ともに美しく、冠は三枚冠またはクルミ冠で、嘴はわずかに曲がり、目は鋭く、耳朶赤く、胸は大きく、頸羽は豊かである。翼は大きくて強く、尾は豊かで長く半円形をしてよく開く。足及び皮膚は黄色である。

地頭鶏

記念物（天然記念物・動物）
昭和18年8月24日指定
所在地：鹿児島市内一円（地域を定めず）
管理団体：鹿児島県

地頭鶏は、鹿児島に残っている薩摩鶏の特異な品種のひとつで、学術上貴重な天然記念物(動物)である。

薩摩鶏とともに、わが国在来の家禽の一つとして、現在飼育されることの極めて少ない品種のひとつで、足が短いのが特徴である。姿がやや不格好なために飼育者が減少し、その数も減少している。高知県の宮地鶏とともに数少ない短脚種である。

地頭鶏は薩摩地鶏から生じた別種で、短脚で、羽毛が非常に豊かで、頸羽は両肩をよく覆い、両翼も地に接するほどで、尾羽も地を曳く。戦いを好むことは薩摩鶏と同様である。

薩摩鶏

地頭鶏